

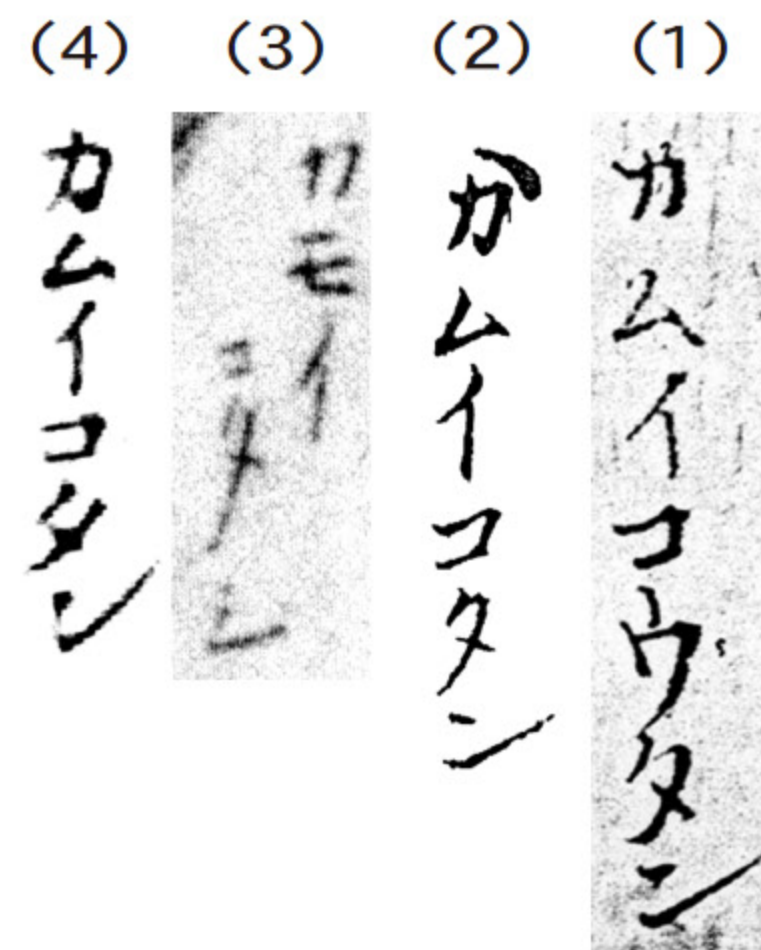
# 断章 旭川のアイヌ語地名研究

(56)

高橋 基

旭川のカムイコタンには、カタカナ表記に、カムイコタンとカモイコタンの二種類の表記があり、明治期に漢字表記の神居古潭となり、明治二十三年九月二十日に神居村が設置されるのである。今回と次回の二回にわたり、カモイコタンから神居村誕生までの歴史を表記を中心に繙いてみたい。

カムイコタンの地名記録で最も古いのは、天明末期から寛政初期(一七八九年前後)の写真①の『松前随商録』(市立函館図書館蔵)の(1)カムイコウタンと言われている。松前藩主の直場所が、カムイコタンを含めた石狩川上流(上川郡)に二カ所設置されていたという記録である。



①『松前随商録』など

査して編纂した地理書の『蝦夷巡覧筆記』(別名『松前地並東西蝦夷地明細記』、掲載のカムイコタンは、別名『松前東西地利』)国立文書館蔵によったで、カムイコタンの初の具体的記録である。すなわち、「カムイコタン

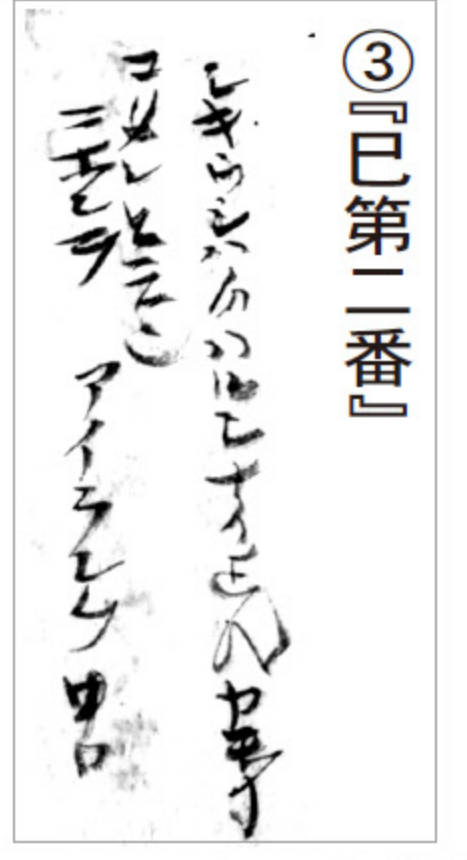
## 旭川のカムイコタン 13

一此旭川中ノ岩工水打付ケ両方工流ル大難所ナリ。

アイヌ五六丁ノ間舟ヨリ荷上ゲ、舟ヲ引キテ川端ヲ行ク。舟二乗リテ上ル事成リカタシ。両方切立岩沢切立ニテ木有リ。沢幅百間ホドナリ」と記している。ただし、これは実際に踏査した記録ではなく、主に聞き取りにより編集したものである。上川では、他にチクベツ(忠別川)とタナシ(棚瀬山、二二四)の二カ所が記載されている。



②『蝦夷語』



③『巳第二番』



④松浦武四郎「再篙石狩日誌」

(3)のカモイコタンは、寛政九年(一七九七年)の自序のある、近藤重蔵の『蝦夷地絵図』(東京大学史料編纂所蔵)のカモイコタンの表記である。(4)のカムイコタンは、同じ近藤重蔵であるが、文化四年(一八〇七年)に、天塩から山越えし、上川を踏査した時の『蝦夷地図』(高木崇世氏蔵)のカムイコタンの表記である。

近藤に続き上川を調査した間宮林蔵は、本連載⑤で紹介した、文化七年(一八一〇年)の『蝦夷地図』(国文学研究資料館史料館蔵)の表記は、カムイ

一年)に稿本『蝦夷語』(松浦武四郎記念館蔵)の凡例で写真②の「神をカムイ」、また神祇で「神—カムイ」と表記しながらも、本連載⑤でも紹介したように、安政四年(一八五七年)、案内をしてくれた、ニホンテとアイランケから、写真③の「シキウシバよりハルシナイ迄をカモイコタンと云也」と教えられ、カモイコタンと表記した。この野帳『巳第二番』から、幕府(箱館奉行所)への報文日誌の稿本「再篙石狩日誌」(共に松浦武四郎記念館蔵)でもカモイコタンと記し、カモイコタンの意味を次のように簡潔かつ最適な表現をしている。

「シキウシバとは、荷物背負場と云事也。惣名是より上をカモイコタンと云。またシユホロとも云。シユホロは両方峨々として中を水の落ちる処と云事也。カモイコタンと云は神が有る処と云事也」

写真④は、右の文章に添えた松浦武四郎自筆の「カモイコタンの図」である。今回は、この松浦のカモイコタンの表記から神居村が誕生するまでの歴史を確認したい。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します